結いの心

地域みんなで結ぶ大きな絆

令和６年２月号
木城町自治公民館連絡協議会
自治公民館活性化支援員　大　津　　新

「備えよ常に」能登半島地震から考えること

Be　Prepared！「備えよ常に」この言葉は、ボーイスカウト、ガールスカウトの創始者イギリスのベーデン・パウエル卿の言葉です。近年、想定外の災害が発生している日本に「災害に備え、常に心身の準備を怠るな」という戒めの言葉にも思えます。

地震発生から一か月が経過し、読売新聞に特集が出ていましたので紹介します。

読売新聞２月１日号より
被災状況：１月 31 日現在

あと１メートル 命救えず

過疎地 消防力に限界

能登半島地震

検証 Ⅱ

発生１か月

能登半島を元日に襲った最大震度7の地震は、230人を超す命を奪い、生活や産業を根こそぎ壊した。依然として多くが避難所生活を余儀なくされ、インフラの復旧もまだ途上だ。過疎、高齢化が進む地域の人々の命を守り、暮らしやコミュニティーを再建するには何が必要なのか。1日で発生から1か月となる被災地で見えてきた課題を検証する。

懸命に安否不明者の捜索を続ける消防隊員ら（１月31日、石川県珠洲市で）＝大金史典撮影

石川県珠洲市の海岸近くに立つ昆慎れた民家は、2階から崩れ落ちていた。発生から数時間、消防団員の石井弘志さん（57）はがれきをかき分けて中に入り、そこに住む団の大先輩の男性を大声で呼んだ。

「ここやぁ」。足を挟まれて動けない。声の方に近づくと横顔が見えた。

「先輩まであと一息。骨組みがはずれさえ邪魔で近づけない。『孫の嫁を見るまで死ぬんよ』。必死で呼びかけたが、反応は弱っていく。津波で体がぬれ、0度近い寒さが体温を奪いつつあるようだった。少しでも温めてあげたい。高台の避難場所に毛布と水を取りに戻った。

住民でつくる消防団は人手も機材も十分ではない。「私らじゃ助けられない。消防署に電話をかけたが、一向につながらない。その間も携帯には助けを求める連絡が入り、火災も見えた。団員としての使命がある。しばらく救助に奔走したが、後ろ髪を引かれる思いで仲間と先輩の元に戻った。悔いた団の倉庫から引っ張り出したチェーンソーで骨組みを切り、手を伸ばして触れた先輩は、冷たくなっていた。

あれから1か月。団活動を手取り足取り基礎から教えてくれた先輩だった。団員は定員割れの15人。連絡も取り合えない地域に近い状況下で一緒に動けたのは数人だけで、消防にも頼れなかった。「それでも何とか救えなかったか」。石井さんは今も無力感を拭えずにいる。

◇

被災地では、安否不明者の捜索が続く。石川県内の犠牲者は、31日時点で238人。このうち警察が検視した222人の死因は、家屋倒壊などによる「圧死」92人（41％）、「窒息・呼吸不全」49人（22％）に続き、「低体温症・凍死」32人（14％）に上った。

日本法医学会から派遣され、遺体の検案を行った水上剛一・金沢医科大教授（53）は「救助が間に合わず、体温が低下してしまった人もかなくない」とみる。

消防署も絶地に立たされていた。奥能登広域圏事務組合の穴田比呂志・珠洲消防署長（58）は「救える命を救おうと必死だったが、人も機材も足りなかった」と振り返る。

発生当日、同署管内の通報把握できているだけで50件超。だが、署員は分署を含めて39人で、3割超は参集できなかった。電動カッターなどを備えた工作車は一台のみ。発生24時間内に倒壊家屋から34人を救助するのが限界だった。

関西大教授（消防行政）は「過疎地の消防力不足が露呈した」と指摘する。同組合の消防署員は計166人。管内2市2町は1100平方キロと広大な上、海岸沿いに集落が点在し、署員配置も分散せざるを得ない。

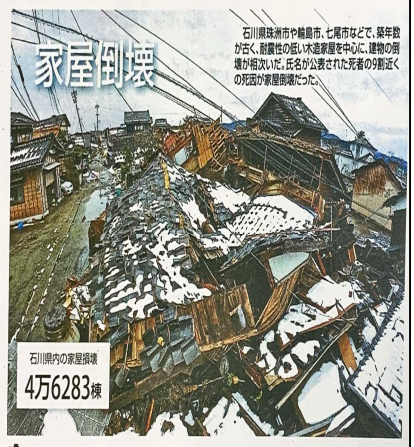
このため、災害時は50分団に計約1000人いる消防団が「頼みの綱」（穴田署長）だ。しかし、高齢化でなり手が不足し、珠洲市の団員（225人）は10年間で1割減少。団員の3分の1が市職員の分団もある。永田教授は「災害時は広域から人員や資機材をいかに早く投入できるかが重要となる」と強調する。だが、その広域応援も今回、難題に直面した。

◆能登半島地震による死因

死亡者数人の検視結果。警察庁まとめ

被害状況	死者	重軽傷者	避難者	家屋損壊
石川県	238(15)人	1179人	14643人	46283棟
富山県	0	47	0	6058
新潟県	0	49	16	13072
その他	0	13	0	247

※1月31日現在。（　）内は災害関連死疑い。避難者数は2次避難を含む



4 多くの家屋が倒壊した珠洲市宝立町地区（1月10日）＝原田拓未撮影

※阪神淡路大震災では「大規模火災・建物倒壊」、東日本大震災では「津波」の映像が流れ、災害状況について強烈に印象付けられましたが、死亡原因は右上にあるように家屋倒壊による「圧死」だったということです。

7 激しく炎上する輪島市の中心部（1月1日、本社機から）＝小林武仁撮影

道路が波打ち、電柱や標識が傾いた内灘町（1月9日）＝柏進洸平撮影

5 土砂崩れで寸断された国道249号（1月2日、輪島市で、本社機から）＝伊藤紘二撮影

※土砂崩れによる交通インフラの分断、大規模な液状化現象による様々な被害の発生が、日常生活や災害復旧に大きく影響し、困難を強いられているのも、今回の地震から再認識させられたことだと思います。今後、生活の様々な場面で、防災・減災について考えていかなければなりません。

※改めて考え、取り組まなければ！

家族・個人で対応する「自助」や町役場・警察・消防などの公的対応「公助」には、災害の規模や状況により限界があります。このため、地域で助け合う「共助」という「絆」が重要です。能登半島地震では、６１館の公民館が避難場所として活用されているとのことです。また、東日本大震災では、被災後の避難所活動が地域全体で運営されたとの報告もあります。今こそ、自治公民館活動を通して「地域力」を高めていきましょう！

宮崎県公民館大会に参加して

２月３日（土）日南市南郷ハートフルセンターで「宮崎県公民館大会県央ブロック大会」が開催され、杉田会長、西副会長、日高理事、柳井理事、尾前理事、森係長、大津の７名で参加しました。

日南市仮屋講自治公民館と串間市寺里自治会の事例発表があり、地域の方々と様々な場面で協働しておられることが参考になりました。講演では、高校生で全国初の町内会長となられた金子陽飛氏の取組の紹介がありました。新たな発想を組み込み、町内（地域）の活性化を図ろうとしておられ、とても感服しました。特に、今までの町内会は、３Ｇ（我慢、義務、犠牲）にまみれていたが、これからは LET（Love（相互愛・共助）、Enjoy（楽しむ・共汗・没頭）、Thanks（感謝・共感））の新しい発想が大切だとのご提言をいただきました。また、活動形態にも「遺伝子継承型町内活動（伝統を引き継いでいく活動）」と「パズル型町内活動（お互いの力・得意分野を組み合わせる活動）」があるので、うまく組み合わせているとの紹介がありました。バイタリティー溢れる講演に様々なご示唆をいただきました。これからの活動に生かしていきたいと思います。

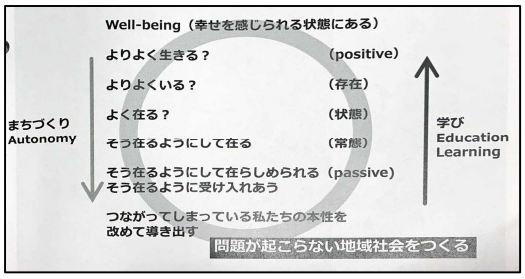
第４回自治公民館連絡協議会役員会

２月１３日夜、今年最後となる役員会が開催されました。第３回自治公民館長会並びに次年度に向け、令和５年度の事業実績報告及び収支決算見込み、令和６年度事業計画及び収支予算の両案などについて協議していただきました。役員の方々には、昼間のお仕事でお疲れの中、一年間ご尽力いただきました。ありがとうございました。

公民館での活動紹介

２月１２日（月）、石河内自治公民館で、新しく地区に転入された５世帯９名の方々の歓迎会が開催されました。移住されて分からないことや不安なことがあるところだと思いますが、このような交流・コミュニケーションを通して、新しい生活の充実につながっていくことと思います。

全国公民館セミナー「シン・公民館」に参加して



※セミナーの中でしきりに出てきたキーワード「Well-being」これからの流行になりそうです。

１月３１日（水）～２月２日（金）に開催された研修会に参加しました。参加者との交流の中で強く感じたのは、全国各地の公民館でも「公民館への関心の低下」「参加者の固定化」「事業（活動）の行き詰まり感」など、同じような課題を抱えていることでした。ただ参加者の意識の中には、公民館の存続だけを重視した「守りの姿勢」ではなく、人と人とのつながり「絆」、様々な社会的課題に対応できる「社会力（地域力）」などの向上を公民館活動で図ろうとする情熱のこもった「攻めの姿勢」でした。

※木城町自治公民館も「結いの心」を大切にして頑張っていきましょう！

※年度末の異動により、転出転入の機会が増える時期となります。安心・安全な地域づくりに向け、自治公民館活動への加入促進をお願いいたします！